

大正俳句とはなんであったか



宮坂静生

—その今日的課題

◆はじめに

二十世紀に入り平成俳句の胎動の中で、いま九十年前の大正俳句を顧みる意義はどこにあるのか。大正俳句は昭和俳句に引き継がれ、その帰趨はすでに周知である。周知の構図を改めて描き直してみても始まらない。すると、明治も大正も昭和もその時代の俳句運動を相対化できる平成現代の地点から振り返って、その当時の俳句運動の課題をもう一度洗い直し、そこに新たな俳句史的意義を見出すところにあるであろう。以下において大正俳句の課題に関し、平成俳句の現代の視点から光を当ててみたい。

◆同時代感覚としての「実感」

正岡子規没後百二年、河東碧梧桐の新傾向俳句ほど現代の俳句へ課題を投げかけた俳句運動はなかったのでは

ないか。明治の俳句をぐっと現代へ引きつけたのが新傾向俳句運動であった。しかし、その結末が季題の放棄、十七音字の破壊、自由律から短詩へ変貌し、当の本人碧梧桐の俳壇引退という尻窄まりの状況から、運動の過程において出された大事な問題提起がさして注目されないで、忘れられてしまうという不幸なことになっていた。

その結果、守旧派と称した高浜虚子の「ホトトギス」の俳句運動だけが一人勝ちし、その経過が大正俳句の歴史として語られてきた。

ところが改めて、平成の現代からその両俳句運動を出る限り忠実に辿ってみると、碧梧桐が新傾向俳句運動の中で提起した問題のいくつかを継承し、新たな道筋をつけたのが虚子であり、「ホトトギス」の俳句運動であったのである。同時代の俳句運動は相手の主張がいつか自分の言い分になり、またその逆の事態も生まれる。以下においてこの点は触れていきたい。のちに、昭和十二

年（一九三七）二月一日、六十五歳で逝去した碧梧桐を、

「碧梧桐とはよく親しみよく争ひたり」と詞告し悼んだ虚子の句「たとふれば独楽のはおける如くなり」には見事に二人の関わりが映し出されている。そればかりではない、二人が担った同時代の俳句運動とは、独楽が互いに振れて廻り、弾け反発することで支え合っていたようなものであった。

新傾向俳句運動は碧梧桐の全国踏破を目指す旅から生まれ、旅を通して変化し、あるいは深まっていた。

旅は三十四歳の河東碧梧桐が三千里を日途に始めた第一次全国旅行の明治三十九年八月六日から引き続き三千里の旅、第二次が終わる四十四年七月十三日まで、都合千三百四日（二年六か月十九日）、かかった費用が当時のお金で七千円であった。記事は「一日一信」「統一信」と題し主として、日本及日本人へ連載された。

本は「三千里」（明治四十三年・金尾文淵堂）、「統一信」（明治四十三年・金尾文淵堂）と出されたが、『統一信』は予告がついに刊行されないで、ようやく昭和四十九年九月に講談社から上梓されて、長途の記録が目に触れることになった。その旅の最後に碧梧桐は「予の旅行が今日の新傾向を生んだのである」と書いている。

碧梧桐本人のいう通り、新傾向俳句運動は明治年間の旅の途上から開始されたが、その運動が抱えた主要な問

題は大正俳壇に持ち越されている。

河東碧梧桐が提起し、結果として虚子が担った最大の問題は俳句表現において、実感をいかに生かし一句をなすかという一点にあった。碧梧桐は自らの問題提起を次のように総括している。

「実感を主として出発点とする場合、趣味の感受性が個々分裂して、単に独り合点に終りはせぬか、といふことと、日常茶飯の平板無味の事相を報告するに過ぎはせぬか、といふ二つの患ひである。季題趣味を固定した狭い範囲に限らうとすれば、実感から出発した句は兎角其範囲を脱出したがる。が、我々の日の前に無尽蔵の趣味を開展してをる大自然の現象から言へば、其の範囲を脱出したからというて、直ちに季題趣味を失ふやうな狭いものではない。実感から捕へた季題趣味は、人為的に固定した化石的頭には響かぬとしても、他の大自然の歎美者には、冥々の裡共鳴する何物かが存する」（『日本俳句第二集の首に』大正二年三月稿）

碧梧桐の主張は固定した「季題趣味」ではなく、現実の自然に触れた実感から出発せよというのである。例えば牡丹の句を作り、牡丹の句を評するとき、無村に依って築かれた牡丹の理想美に拘束される。これが従来の季題趣味といわれる、ものの本意に囚われた見方である。

季題趣味は確かに理想化された見方であるが、側面からすると実物や実景からは離れた固定化したものになっている。そこでもとの自然に返れ、真に返れというのが実感重視の新傾向俳句運動だといふのである。

上記の引用文は碧梧桐のもつとも肝心な主張である。

新傾向俳句爛熟期の選集「日本俳句鈔第二集」(政教社・大正二年二月十七日)に書かれた長文の序文の一節であるが、高浜虚子が大正俳壇へ復帰した大正二年(一九一三)、まず書いた新傾向俳句批判の文章「所謂『新傾向句』雑感」(「ホトトギス」大正二年六月号)は上記の選集や序文を読んだ直後に書かれたものと推測される。後掲の虚子の批判を理解する上からも碧梧桐の序文が書かれた背景を説明しておきたい。

碧梧桐選「日本俳句鈔第一集」(政教社・明治四十二年五月四日)が出され、全国を風靡した新傾向俳句運動も碧梧桐の模範とした実感論「無中心論」(明治四十三年十二月稿)が知れ渡る過程で内部分裂を来していく。新傾向俳句の牙城「層雲」(明治四十四年四月創刊)に結集した有力な同行者がやがてそれぞれの主張から、古典俳句を目指し伝統を重んずる大須賀乙字が去り、自由律、無季へ走る荻原井泉水や中塚、碧楼が決を分つ。他方に、「ホトトギス」雑詠選を再開し、大正二年一月号「ホトトギス」に反新傾向俳句の旗幟を鮮明にした虚子がいた。

以上のような状況の中で書かれた序文は、碧梧桐ひとり新傾向俳句内の守旧派として碧を護持していた時期のものである。それだけに書き方は、新傾向俳句運動を顧みて、その傷口を曝け出したような率直さが見られるが、主要な実感論に關してはこれだけでは分かり難い。そこで、以下において、実感論が生み出される過程を中心に、新傾向俳句運動の発端当初と最盛期における「無中心論」の問題点を具体的にみていきたい。

第一次の旅の最終地長岡で明治四十年十二月十日、碧梧桐は大須賀乙字から「日本俳句」(「日本及日本人」碧梧桐選俳句欄)の近來の傾向について暗示法だと指摘された書信を貰っている。

この手紙の趣旨を乙字は評論「俳句界の新傾向」(「アカネ」明治四十一年二月号)に書いている。そこでは、暗示法の例に次の句をあげている。

思はずもヒヨコ生れぬ冬薔薇 碧梧桐

この句の「冬薔薇」には「一種暖かな感じ」があるといいい、「この頃の陽気は狂ったような日和続き、ヒヨコも生まれれば薔薇も咲く」と、暗示法を象徴的用法に属するものと説明した。

碧梧桐は乙字の指摘を「多少吾意を得た説明」と肯定した。この乙字の文章が契機になって、新傾向俳句は「新傾向に非ざれば俳句に非ず」といわれるほどの全国

的な流行をみるのであるが、今からみると乙字は碧梧桐の「冬薔薇」の句を読み違えていたのである。

碧梧桐は従来の季題趣味から離れ、いまだ季題になつていない実景の冬薔薇を一句の添景として詠んだのだ。

冬薔薇を詠んだ俳人は碧梧桐の作より一年前に、秋田で石井露月と「俳星」(明治二十三年創刊)を出していた日本派俳人島田五空に「冬薔薇鵲の散毛かかりけり」(「俳」所収・明治二十八年)があるだけで、珍しい句材である。冬薔薇からはひんやりした寂しい美しさを感じても、乙字がいう「一種暖かな感じ」はない。ましてや冬薔薇が一句の中で格別の暗示や何かを象徴したものではなかった。同じ時期の作、

から松は淋しき木なり赤蜻蛉 碧梧桐

一句の季題赤蜻蛉は落葉松への「添景」に過ぎない。一見、淋しい情感を醸しているが、赤蜻蛉には季題趣味に纏わる伝統的な情緒はなにもない。碧梧桐はむしろ象徴くずしのために置いたのである。したがって「冬薔薇」も暗示法とは逆の例句ではなかったか。

やがて、碧梧桐は第二次全国旅行の途中、明治四十三年十一月十四日安芸竹原で、こんな句を例に「無中心論」を説く。

雨の花野来しが母屋に長居せり 中塚響也

この論こそが、実感を生かし碧梧桐流の写生により自

然を捉えんとした碧梧桐の新傾向俳句の頂点であった。それだけに碧梧桐派の内外から反論を呼ぶことになった次第はすでに指摘した通りである。

碧梧桐によると、花野という季題に当たることがあっても、そこに中心点があるのではない。雨中の花野を通つて来て、離れの吾が家に帰るべき者が母屋に立ち寄り長居をしたという事実を淡々と述べたことに意味を見出している。その点を碧梧桐は、このようにいった。

「中心点を捨て、想化を無視するといふことは、出来るだけ人為的法則を忘れて、自然の現象其まゝのものに接近する謂ひである。偽らざる自然に興味を見出す新たな態度である。」(明治四十三年十二月稿・「新傾向句の研究」大正四年六月)

従来の俳句のように季題に中心点を置くのではなく、中心点を設けなくて、事柄の移動をできるかぎり自然に描写する。碧梧桐は俳句の定型と季題趣味を守りながら、このような無中心俳句の誕生によって、従来の俳句にはない新世界が出現したと狂喜したのである。

季題があっても、季題に拘らない新世界では表現を革新する意志があれば、自ずから「火事場にポンプを引き出す前、先づ半鐘を打つて、出火といふ印象を人に与ふる如きもので」、「半鐘」に当たるものから、「ポンプ」に当たるものまで自然なまとまりが付くといふのである。

また実感に基づく日常茶飯事の報告に随するという冒頭の問題提起についても、こう考えている。碧梧桐は「自覚した者には、人としての我を磨く欲望」があり、実感とは、「其我を作る努力の一つの光り」だから、人類が存するかぎり「普遍我」を目指し、個人の表現行為には「個我」の向上発展が必ずあるものだといっている。

高浜虚子の生涯を顧みると、その俳人としてのしたたかな強靱さが虚子の活力になったのではないかと思う。多くの仲間と歩み、「ホトトギス」にあつて優れた門下を育てながら、虚子は巧みに絶えず相手からエキスを吸収することで、茫洋と大きく、ますますしなやかになっている。そのような虚子の「したたかな強靱さ」が培われたのが大正期であるが、とりわけ、碧梧桐の新傾向俳句からの影響は大きい。

虚子が新傾向俳句を批判した文章は先に触れた大正二年六月号「ホトトギス」に載る「所謂『新傾向句』雑感」である。そこでの批判の趣旨は次の点だ。

○新傾向という名前は碧梧桐一派だけのものではない。しかるに、碧梧桐派の新傾向を俳句全体の傾向のように使うのは許せない。

○あらゆる思想や形式を破壊することを目指した自然主義の文学運動の主張をもとに、碧梧桐派は俳句存

立の二大拘束——「十七字の制限・五七五の調子」「季節趣味」——をある点まで破壊しかかっている。

○ところが近來の新傾向運動は行き詰まったのか、俳句の二大拘束を「俳句の土台」だといひ出し、当初掲げた革命運動の実行回避、スローガンの取り消しという偽りの傾向をみせている。これで碧梧桐派の新傾向俳句運動は失敗に終わったといえる。

これは新傾向俳句運動への現象面に関する批判であつて、碧梧桐が従來の季節趣味俳句批判として展開した実感に関しては触れていない。大正現代の俳句が季節趣味からではなく、実感に基づいて詠われることは、たとえ季節を題詠にした俳句であっても必要なことを虚子は十分に気づいていたのである。

明治四十一年九月一日以降、写生文と小説執筆に集中するために俳句界を引退していた虚子が明治四十五年七月「ホトトギス」雑詠選を再開し、俳句に復帰したのは大正二年である。

一月号には巻頭に「高札」七条が掲げられた。

「平明にして余韻ある俳句を鼓吹する事／新傾向に反対する事」がその一条にある。「平明にして余韻ある俳句を鼓吹する事」とは、本来、俳句はこうありたいとの願ひであろう。が、時がときだけに「晦渋にして難解」な新傾向俳句を意識し対抗する気持が感じられる。と同

時に、この時期に虚子が主張する「主観写生」のスローガン自体に、俳句が難しくなりかねない心配はあったのである。「主観写生」とはいいい方は違うが、まさに碧梧桐が重視した実感を重視した俳句方法ではないか。

大正二年二月十一日紀元節の日に、三田俳句会に招かれた虚子は席上、次の句を詠んだ。

春風や蘭志抱きて丘に立つ

虚子

虚子はこういつている。「余は蘭はうと思つてを、蘭志を抱いて春風の丘に立つ、句意は多言を要さぬことである」(『暫くぶりの句作』・「ホトトギス」大正二年三月号)。

いろいろなわななくても判つていえるといえ、一月号「ホトトギス」に高札を掲げ反対した、新傾向俳句から自らの目指す「平明にして余韻ある俳句」を護る決意を「蘭志」といったものであらう。なりふり構わないで鬱勃たる蘭志を剥き出しにした句である。それだけに、掲句は虚子のいう「主観写生」の句であつても、およそ「季節趣味」の句ではない。「春風」は季語には違ひないが、「古人が折角研究し来つたところの所謂俳諧趣味」と虚子という春風の「季節趣味」を吹き飛ばすような、この時の虚子の実感が滲み出ている作である。これは虚子の調子ではなく、碧梧桐の句調を虚子が乗っ取つたような勢いがあろう。

かつて碧梧桐が明治四十年十二月十日、長岡の宿で、

乙字から「日本俳句」の近來の傾向は暗示法を思わせる「新傾向」だとの書信を貰つた時に、ふと碧梧桐は季語「春風」をとりあげ、季語の連想について考えている。

「一日一信」(『日本及日本人』の最後(後に、『続三千里上巻』巻末に所載))に出る記事である。あるいは虚子の記憶にあつたかとも思われる。碧梧桐は、長い間季語春風を使つていると、春風の連想が頭に沁み込んで来ているので、尋常一様な用い方では満足しないで、自然暗示的な用い方になるというのである。

虚子の掲句の「春風」は尋常一様な用い方ではない。

碧梧桐の「季節趣味」批判の土俵を虚子が取り込んでいゝるのではない。虚子は「季節趣味」を唱えながら、自分の句では同時代としての実感から出発しているのである。

◆◆◆ 地貌の発見

「大正二年の俳句界は二の新人を得たり、曰く普羅、曰く石鼎」と大正二年一月号の「ホトトギス」で推挽された前田普羅と原石鼎は、「進むべき俳句の道」で「石鼎君の句は春の如く夏の如く、豪華、跌宕、普羅君の句は秋の如く冬の如く、簡素、雄勁、それそれ異つた姿態を具へてゐる」(『前田普羅』・「ホトトギス」大正八年八月

号」と鮮やかに対比されて評価される。つづいて、大正三年四年になると、「ホトトギス」雑誌では村上鬼城と飯田蛇笏の活躍が際立つ。鬼城は子規派の初めての選集『新俳句』（明治三十一年三月刊）に句が載る早くから知られた俳人である。蛇笏も同じように、早稲田の学生時代から虚子と接触があり、明治四十一年八月、一か月にわたる俳句鍛錬の「日盛会」（俳諧散心）にも加えられた有為な青年俳人である。いずれも大正初期の「ホトトギス」黄金時代を築く作家であるが、共通していえることは、都市東京以外の地域との関わりが深いことである。

鬼城は父親の後を継ぎ、高崎裁判所代書人として、昭和十三年亡くなるまで高崎に在住している。蛇笏は学生時代七年間を東京で過ごし、明治四十二年卒業を捨て甲斐の郷村境川村に帰農し、昭和三十七年そこで生涯を終えている。石鼎は二年近く東吉野に住み、大正二年山陰の地に二年仮寓した後、上京している。普羅は父親の故郷九十九里浜に近い千葉県南白亀川（なまがまがわ）の地への憧憬を抱き、東京や横浜で過ごし、関東大震災以後、富山へ移住し、戦後富山を離れるまで北陸の地を愛している。

夏草に這上りたる拾蚕かな
芋の露連山影を正しうす

鬼城
蛇笏

から言へば、地方的特習の趣味の發揮されないやうな文学は、幼稚な単純な文学であるとも言へる。寒帯に育つた者も、熱帯に生れた者も、同一趣味を謡うてをるやうでは、遂に季節に対する個性の闡明する時代はないと思ふ」（『俳句の新傾向に就て』「地方的特習」明治四十二年三月稿）といい、「風」の例句を南国長崎と北国津軽など東北地域から掲げている。

長崎の風 風の陣帯屋榊屋ぞ人も知る 田士英
撫切といふ風風の日和かな 儒堂
東北の風 津軽風南部大風一つかな 天郎
風揚げやこころ一郷の林原 師竹

その他、東北の風土を鮮やかに描いた作品を掲げて、「東北の特習ではあるが、これやがて季節趣味の個性を發揮するものではなからうか」といっている。

炉話の牛馬の外はなかりけり 山梔子
雪倒れ春まで知れぬこころかな 櫻魂子
山鳴りと家鳴りや雪の二夕響 鳴秋

碧梧桐が明治四十年代に新傾向俳句の特色として掲げたことと同様の趣旨を大正中期の蛇笏が説いている。俳句は「信念と情熱」をもって人生の美を「霊的」に描くもので、「徒らに季節觀念に囚はれ過ぎた一種の小心地をもつて拵へ上げんとする軽浮なる俳句」（『霊的に表現されんとする俳句』）を否定したいという。

淋しさにまた銅鑼うつや鹿火屋守
春尽きて山みな甲斐に走りけり 石鼎
普羅

虚子の俳句界復帰直後にあたる大正初期の「ホトトギス」が、地域と関わるこれらの優れた俳人による、風土色ゆたかな作品によって活気を呈したことは偶然のようでありながら、偶然ではない。時代がそれを求めていたのである。そのような時代の欲求をいち早く詩人的直感で察知したのが碧梧桐であった。

碧梧桐の新傾向俳句運動の特色の一つが地域の風土に根ざした個性ある俳句を鼓吹したことである。地域の特色を「地方的特習」といい、地方的特習をしっかりと詠うことが詩としての普遍性を獲得すると「季節趣味」と関わりながら説いている。

飯田蛇笏が「霊的に表現されんとする俳句」（『ホトトギス』大正七年五月号）で主張し、のちに前田普羅が「自然を愛する」と謂ふ以前にまづ地貌を愛する」ことが大事だと、句集『春寒浅間山』（増訂版・靖文社・昭和二十一年十二月）の序で「地貌」を詠えと力説した点が、すでに碧梧桐によって鮮やかに問題提示がなされ、実践されているのである。

「詩は普遍的性質を帯びねばならぬといふことと、地方的特習を詠むといふことは、皮相の観察では殆ど背反したことであるけれども、一方自己の経験を主とする点

関東大震災以後、大正十三年五月、報知新聞富山支局長として富山に赴任した普羅は北陸や奥飛騨や浅間山の句を詠んだ。のちに句集『春寒浅間山』を上梓するときに、碧梧桐のいった「地方的特習」の視点を「地貌」と称し力説する。飛騨と能登と浅間山の句を同じ句集に一緒に収めることはできないといい、次のように書いている。

「自然と称へて一塊又一塊の自然を同一視することが出来ないのである。国々はかくて一つ一つの体系である。裏日本の雪で育てられた俳句と、表日本の明るさが与へてくれた俳句を、一枚の紙に並べ書いて見るのは、到底著者の堪へ得るものでは無いのであった」（『春寒浅間山』増訂版・靖文社・昭和二十一年十二月）

以上、碧梧桐が新傾向俳句を進める中で、説いた地域への視点がいかにも大正以後の俳句に課題を投げかけているか考えてみた。さらに、大正から昭和にかけて地域とは反対に、都市俳句が起る中で、水原秋桜子や山口誓子らが俳句の素材にした牧場や湖や温泉なども碧梧桐らが「日本俳句」で盛んに取り上げた句材であったのである。これはまたの折に取り上げてみたい。